

日本語学習者がターン交替時に使用するディスコースマーカー  
—日本語母語話者との比較—

磯野 英治・上仲 淳

1. はじめに

初級以上の日本語学習者は、それまでに得た知識を基盤として、実際に日本語を運用する機会が増える。このため、特に初級を終えたレベル以上の会話教育の中心的な課題が運用能力の習得と向上であるという指摘がされてから久しい。また「会話」とは、ターン交替によって成り立っており<sup>1</sup>、かつ日本語母語話者の会話において「いきなり会話を始めたり言いたいことを話す、あるいは命題的意味のみを話すような直接的な発話は少ない」ことも明らかになっている(磯野2009、2010a,b、2011a,b,c、2013)。換言すれば、「内容そのもの」の他にあいづちやディスコースマーカー<sup>2</sup>などの要素をうまく組み合わせなければ会話が続かない(ターン交替が続かない)、すなわち円滑なコミュニケーションが行えないということである。従って、初級以降の会話教育における習得事項は、このような会話の内容に直接関係ない項目も含むものと考えられるが、自然会話ならではの項目を「日本語教育のためのという『視点』で捉えなおす必要性」(宇佐美2012)が論じられるようになってきたのは最近の事である。このことから分かるように、日本語の会話においてターン交替の観点から「いかに会話が展開しているのか」という要素に関して、特にその具体を報告しているものは少ない。磯野(2013)では、ターン交替時の発話の形式的分類(あいづちやディスコースマーカーなど)の分析のほか、そのバリエーションに関して、日本語母語話者の会話の展開の際にどのようなディスコースマーカーが出現し、ターン交替しているのかを具体的に明らかにしている<sup>3</sup>。例えば、以下の会話例に見られるターン交替時の発話「あー」

---

<sup>1</sup> 磯野(2010a)では、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974)が「エー、アー、シー」などの発話は、ターンテイキングの際に起こりうる沈黙を避けるためのものであることを挙げ、多くの場合話者は一人ずつ交替に話し、発話ターンの長さや順序は一定ではないが、ターンの移行は秩序正しく調整され、発話の重なりなどはあまり見られないといった報告をしていることを指摘している。またさらに Levinson (1983)も Sacks, Schegloff & Jefferson (1974)の内容に触れ、会話が多くの場合、発話が重なったり、間が生じることなく進行するのは、発話ターンの移行する可能性のある「移行適格場所 (TRP)」が予想されているからであるとまとめている。

<sup>2</sup> 本研究における「ディスコースマーカー」とは、談話の連結やコンテキストの調整に重要な働きをもっていると考えられる要素で、具体的には表4に見られるような表現形式を指す。これらの存在や機能に関しては Schiffrin (1987)など、多くはないものの英語の会話研究において以前から指摘があった。このため、「あいづち」と「ディスコースマーカー」は異なるものとして区別している。詳しくは磯野(2010a)を参照のこと。

<sup>3</sup> 磯野(2009、2010a,b、2011a,b,c、2013)の一連の研究では、ターン交替の認定の観点から「Basic Transcription system for Japanese: BTSJ 2007年3月31日改訂版」(宇佐美2007)を採用し、文字化に際して3次チェック(ピアチェック)まで行って、データベース化している。また、後述する形式的分類に関するコーディングでは、第三者を立てて評定者間信頼性係数である Cohen's Kappa

に関しては、形式的分類をディスコースマーカーとし、さらにその下位分類であるファイラーとして分類を進めた<sup>4</sup>。

<ターン交替時の発話の分類例と会話例>

形式的分類：A.ディスコースマーカー a-3.ファイラー

表現形式：あー

IN	じゃあ、まあ今のはアルバイトだったんです(あ)けども(はい)、将来的になんか仕事で懂れてるというか、どんな仕事につきたいとか>{<}。
M04	<あー>{<}、えっと、そうですね、えっと、金融関係に興味があつて、今4年生(ふん)で就職活動(ええ、ええ)、してってー(はい)、そうですね、えっと一応、しょ、証券会社に一社、頂い、<たところがあつたんで>{<}。

本研究では、この磯野(2013)の発展的な研究として、同様の方法論をもとに日本語非母語話者の日本語会話におけるターン交替時の発話の形式的分類、および表現形式のバリエーションに関して、日本語母語話者と比較することによって、その実態を明らかにすることを目的としている。本研究の意義は(1)そもそも「表現形式」に関して量的に具体的なデータを明示している研究がほとんどないため資料としての価値がある、(2)日本語母語話者と非母語話者の傾向を比較することによって、これまでに日本語教育の中で学習者の自然習得に任せていた部分は何だったのかを明らかにすることによって、より実際の日本語を会話教育に取り入れていくための材料を提示する、という二点である。

## 2. 先行研究

既述のように磯野(2009、2010a,b、2011a,b,c)では、まず日本語母語話者の会話におけるターン交替時の諸特徴について、形式的分類から明らかにした。条件統制を行った日本語母語話者24名(男性12名・女性12名)の会話データをもとに、形式的分類に関する定量的分析を行い、ターン交替時にどのような発話から会話を開始し、円滑なコミュニケーションを図っているのかに関する調査である。表1は日本語母語話者データの概要<sup>5</sup>、表2は形式的分類<sup>6</sup>で、日本語母語話者間の会話では、あいづちやディスコースマーカーの形式でターン交替時の会話を展開することが多いことがグラフ1から分かる。

(Bakeman&Gottman 1986)を算出し、単純一致率から偶然一致率を差し引いた数値が $\kappa=0.910$ で基準となる $\kappa>0.75$ をクリアしている。

<sup>4</sup> 話者や形式的分類を示す記号については表1と表2を参照のこと。

<sup>5</sup> 本研究で対象となったデータは「mic-J corpus-外国人へのインタビュー篇一」「mic-J corpus-日本人へのインタビュー篇一」として公開されている(<http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/mic-j/>)。詳細は西郡・崔・磯野(2010)を参照されたい。

<sup>6</sup> 形式的分類の詳細については磯野(2010a)を参照のこと。

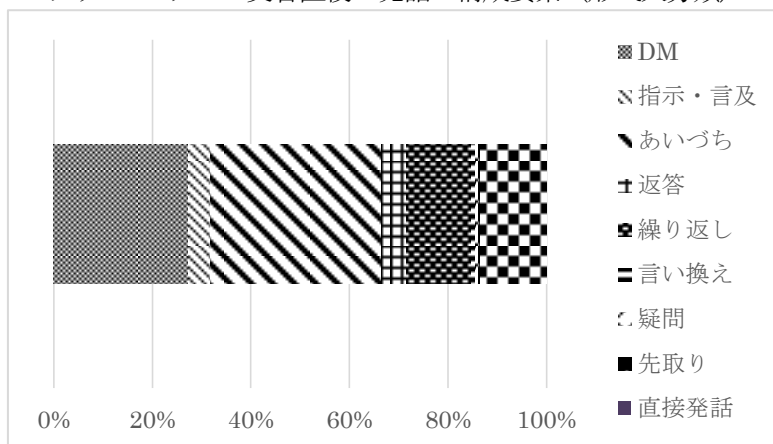
表1：日本語母語話者データの概要

グループ	年代	現在の言語環境	会話協力者の属性	会話総数
日本語母語場面	インタビュアー 30代  学生 (被験者) 20代	東京 (共通語)	インタビュアー (IN) 1名 (女性) × 日本語母語話者 (M01-12 F01-12) 男女各12名	24会話

表2：形式的分類

A.ディスコースマーカー(DM)	a-1.接続 a-2.つなぎ言葉 a-3.フィラー
B.指示・言及	b-1.指示 B-2.言及
C.あいづち	c-1.はい系 c-2.そう系 c-3.感動詞系 c-4.その他
D.返答	*
E.繰り返し	*
F.言い換え	*
G.疑問	*
H.先取り	*
I.直接発話	*

グラフ1：ターン交替直後の発話の構成要素（形式大分類）



磯野 (2013) では上記の分析に加えて、先行研究において資料がなく、しかしながらターン交替に重要な役割を果たすディスコースマーカーの表現形式について、後述

の表4（本研究の分析で日本語学習者の表とともに提示）のような分析を行っている。一方、磯野・上仲（2014）では、既述の日本語母語話者データと同様の方法で作成した日本語学習者データで、日本語学習者の日本語の会話におけるターン交替時の発話の分析も行った。その結果、グラフ1のような形式的分類においては、日本語母語話者とその構成要素の割合が大きく変わらないことが明らかになっている。

### 3. 研究概要

上記を踏まえ、日本語母語話者と日本語学習者のターン交替時の会話を比較し、その表現形式においてどのような共通点、あるいは違いが認められるのかを明らかにすることが本研究の中心的課題である。分析に先立って、磯野・上仲（2014）に基づき外国人日本語学習者データの概要を以下に記す（表3）。被験者の詳細な背景情報は磯野・上仲（2014）を参照願いたい。端的には外国人日本語学習者の日本語レベルは中級から上級で、プロの日本人インタビュアー1名に対して日本語学習者の男女20名（男女各10名）、被験者の年齢はインタビュアーよりも年下、初対面といった条件統制も日本語母語話者データと同様にしている。

表3：日本語学習者データの概要

グループ	年代	現在の言語環境	会話協力者の属性	会話総数
日本語接触場面	インタビュアー 30代	東京 (共通語)	インタビュアー (IN) 1名 (女性)	20 会話
	学生・社会人(被験者) 10-30代		× 外国人日本語学習者 男女各10名	

### 4. 分析と考察

まず、日本語母語話者と日本語学習者のターン交替時のディスコースマーカールにおいて、どのような表現形式が出現しているのか、またその出現数を把握するため、磯野（2013）の日本語母語話者の分析結果（表4）と併せる形で、本研究で行った分析（表5）を以下に提示する<sup>7</sup>。

<sup>7</sup> 日本語学習者のデータに関しても、データベース作成に伴う文字化の際に3次チェック（ピアチェック）を行い、形式的分類のコーディングに際してはCohen's Kappaを算出し、 $\kappa=0.912$ を確保している。

表4：日本語母語話者のディスコースマーカ―

出現頻度 (回)	表現形式の種類 (回)
104~35	あー(104)・なんか(53)・えっと/で(40)・うーん(35)
34~17	まあ(34)・あの <sup>8</sup> (33)・えーと (28)・えー(26)・あの一(17)
16~12	あと(15)・いや(14)・でも(12)
11~8	いやあ(11)・えっと一/だから(9)・ちょっと/やっぱ(8)
7~6	あとは/あんまり/えー/なんだろう(7)・えと/もう(6)
5~4	ま/ん一(5)・こう/その(4)
3	いやー・その一・それで・じゃあ・っていう・と・で一・どうなんだろう・なんていうんですかねー・やっぱり
1	あーあー・あと一・う・えと一・かー・じゃ・それって・それと・ただ・だーから・ついでに・っと・ていうか・ていう風に・てって・とりあえず・とりあえずなんか・どうでしょう・どうですかね・どうなんでしょう・どうなんでしょうね・どうなんですかね・なので・なん・なんかちょっと・なんだろう・なんでも・なんでしょう・なんだっけ・なんて・なんていうか・なんですけど・に・ので一・ま一・もうちょっと・やはり・んで (計624)

表5：日本語学習者のディスコースマーカ―

出現頻度 (回)	表現形式の種類 (回)
43~18	うーん(43)・あ一(37)・えーと(20)・え一(18)・でも(18)
15~8	まあ(15)・あの(14)・えと一(10)・ん一(8)
7~5	いや(7)・うん一(6)・えと(6)・で(6)・あの一(5)・えっと(5)・なんか(5)
4~2	だから(4)・す一(3)・えーと一(2)・ちょっと(2)・と(2)・づ(2)・では(2)・は(2)・ま(2)・やっぱり(2)・
1	あと一・あとは・あまり・一応・うー・うーん一・うんと・えーえー・えっと一・お一・けど・けれども・そして・それから・それで一・それと・ですから・で・でも一・と一・また・もう (計270)

表4と5を比較すると以下のような質的、量的な違いが明らかになった。まず、日本

<sup>8</sup> ここで見た「あの」は「あの一」の長音が外れたものであり、指示詞の「あの」ではない。

語母語話者はターン交替時において「あー」という表現形式が最多であったが、日本語学習者の場合は「うーん」という表現形式が最も多かった<sup>9</sup>。日本語母語話者のデータで圧倒的に多く出現した「あー」は、日本語学習者の発話においても使用頻度が高かったが「うーん」の方が上回った形である。

また、日本語学習者の使用するディスコースマーカ―は、日本語母語話者と比較すると、表現形式の種類が少ないことも明らかになった。具体的には「うーん/うん」「えとー・えと・えとー」などの種類のバリエーションは使用しているものの、日本語母語話者ほどの多様性はない。つまり、日本語学習者は日本語母語話者に比べて限られたディスコースマーカ―の要素を巧みに活用して会話を展開していることがわかる。しかし、その一方で、日本語学習者のデータからは日本語の会話では不自然な「a-3.すー」「a-3.づ」など中間言語的とも言えるディスコースマーカ―が出現している。さらに、被験者別にデータを分析すると、特定のディスコースマーカ―を頻繁に使用する被験者群があり、特に男性にその傾向が強く見られた。例えば、INMAは「まあ」を、EGMIは「うーん」を、THMIは「えとー」系のディスコースマーカ―を多用し<sup>10</sup>、時には連続して使用していた。

次に、ディスコースマーカ―の下位分類である「つなぎ言葉 (a-2)」に注目すると、「a-2.なんか」の出現順位は、日本語学習者のものは日本語母語話者ほど高くはなく、加えて縮約形「a-2.やっぱ」「a-2.んで」などは出てこなかった。「a-2.やっぱ」「a-2.んで」などのいわゆる砕けた表現形式は、日本語母語話者がよく活用するため日本語学習者も日常生活の中でこれらに触れる機会があると考えられるが、少なくとも今回の日本語学習者のデータの中には現れておらず、運用には至っていない。

以上、表4.5から日本語母語話者と比較することによって日本語学習者が使用するディスコースマーカ―の種類やその傾向について分析結果を述べたが、次に本研究が日本語教育、とりわけ会話教育へどのような示唆を与えうるか、その可能性について考えてみたい。

先に述べたように、日本語学習者は、限られたディスコースマーカ―の要素を巧みに活用しながら会話を展開している一方で、その種類は限られており、日本語学習者特有の中間言語的なディスコースマーカ―や使用の偏りも見られた。また縮約形など砕けた表現形式は見られなかった。縮約形は使用相手や使用場面を考慮すれば、会話

---

<sup>9</sup> 本研究における比較では一会話あたり、あるいは会話データの総量によって表4および5の出現頻度に差がみられた。しかしながら本研究で明らかにしたいことは、「どのような表現形式が出現し、またその数が多いのか」という観点からの日本語母語話者と学習者の相違点であり、その頻度(回数)の比較を行うものではない。

<sup>10</sup> INMA (Indonesian Male Advanced インドネシア人男性・上級) は一会話で合計13個のディスコースマーカ―のうち9つが「まあ」であった。他に、EGMI (English Male Intermediate アメリカ人男性・中級) は15個中12が「うーん」、THMI (Thai Male Intermediate タイ人男性・中級) は「えとー、えとー、えとー、えとー」など「えとー」系のディスコースマーカ―が17個中15を占めていた。

相手との心的距離を短縮するポジティブ・ポライトネス<sup>11</sup>として作用し、円滑な対人関係を形成するコミュニケーション・ストラテジーともなりうる。また、近年の研究によると、フィラーをはじめとするディスコースマーカ―は、スピーチレベルシフト<sup>12</sup>や話題転換と共起する一種の標識として機能することも報告されている(三牧2013)。また、三牧(2013)のみならず、ザトラウスキー(1993)も指摘しているように、会話分析的見地から、隣接ペア<sup>13</sup>のうち第1ペアが勧誘や招待あるいは依頼などの時、返答が期待に反する場合は、第2ペアが言いよどみ(フィラー)を挿入したりしながら構造的により複雑で有標なターンとなる。すなわち、勧誘や招待や依頼に対しての「断り」の場面で、フィラーが挿入されることが多くなるとの指摘がある。このような断りのシークエンスには勧誘や依頼が行われた人物間における対人的な配慮(ポライトネス)が含まれており、本論で取り上げたディスコースマーカ―もこのような一連のシークエンスの構成要素となる場合が多いと考えられることから、ポライトネスとの関連も想定される。

一般的に、日本語学習者を対象とした授業でここまでする中心軸として教える必要はないが、使用頻度の高いディスコースマーカ―の種類や、砕けた言い方があること、また、コミュニケーション・ストラテジーとしての用法は、授業の中で大枠の説明をしてもよいだろう。学習者は日本語の接触場面で必ずこういった用法に遭遇するため、従来通り学習者の自然習得のみに委ねるのではなく、意識的に習得を促進させる取り組みが必要となるということである。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、日本語学習者がいかにターンを交替し、円滑なコミュニケーションを図っているのかについて、日本語母語話者との比較からディスコースマーカ―、とりわけその表現形式の分析を行った。日本語学習者は、日本語母語話者ほど多くの表現形式を使用しているわけではなく、中間言語的な不自然さや話者による偏りも明らかになった。たとえターン交替による会話の展開が円滑であったとしても(会話の進行に問題がなかったとしても)、中・上級話者にこれらの特徴が表れた点は興味深い。言い換えれば、本研究で明らかにした要素は、これまでは日本語教育において特に強調されてきた訳ではなく、学習者の自然習得に委ねられてきた部分が大きいが、特に会話がターン交替の連続体であることから考えると、これらのストラテジーを体系的に教育へ取り入れていくことも今後は必要となるということである。

これまでに本研究のような具体的な表現形式の出現順位やそのバリエーションが一定の方法論を基盤として提示された例は少ない。その意味で、まず基礎研究としてそ

<sup>11</sup> Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論で、他者に理解され近づきたい欲求をポジティブ・フェイスとし、その欲求を満たすための配慮をポジティブ・ポライトネスと呼ぶ。

<sup>12</sup> 同一談話内に見られる「です・ます体」と「普通体」の発話間の変動を指す。

<sup>13</sup> ザトラウスキー(1993)は、勧誘の談話に「話段」という単位を導入し、話段内部における勧誘者と被勧誘者のストラテジーの解明を試みている。

の実態を明らかにしたことが本研究の意義だと言える。今後は、表2にある形式的分類の項目それぞれについて比較分析を行うことで、事例に留まらない体系的なコミュニケーション論の枠組みを構築することを課題としていきたい。

## 参考文献

- 磯野英治 (2009) 「日本語母語話者のターン交替における定量的分析とその語用論的特徴について—会話教育への示唆—」『2009年度韓国日本学会傘下学会連合学術大会 Proceedings』、韓国 日本学会、pp.122-126.
- (2010a) 「日本語母語話者の会話におけるターン交替の特徴について—インタビュー会話における定量的分析から—」『日本研究』Vol.28、韓国 中央大学校日本研究所、pp.137-158.
- (2010b) 「日本語母語話者のターン交替における語用論的特徴について—機能的分類による定量的分析と会話教育への示唆—」『日本学報』第84集、韓国日本学会、pp.227-240.
- (2011a) 「日本語の会話におけるあいづち・ディスコースマーカ어의語用論的特徴と会話教育への示唆」『중앙대학교 국제학술심포지엄 한·중·일 3국의 이문화커뮤니케이션에 관한 보편성과 특수성 (Chung-Ang University International Symposium : The Universal and Distinctive Traits in Cross-Cultural Communicative Patterns of Three East Asian Countries; Korea, China and Japan)』、韓国 中央大学校、pp.23-33.
- (2011b) 「日本語母語話者の会話における表現形式とその語用論的特徴について—ターン交替時の発話に着目した定量的分析—」『2011年度韓国日本学会傘下学会連合学術大会 Proceedings』、韓国 日本学会、pp.81-86.
- (2011c) 「ターン交替時の発話に着目して話し言葉の機能・効果に迫る—日本語母語話者間の会話における定性的分析—」『The Third International Seminar on Japanese Linguistics and Japanese Language Education』、インドネシア教育大学、pp.1-13.
- (2013) 「日本語会話における表現形式と機能の多様性について—ターン交替時の発話に着目した定量的分析—」『日本学報』第94集、韓国日本学会、pp.67-78.
- 磯野英治・上仲淳 (2014) 「日本語学習者の接触場面におけるターン交替時の発話の語用論的特徴」『大阪大学国際教育交流センター論集 多文化社会と留学生交流』第18号、大阪大学国際教育交流センター、pp.31-39.
- 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金 基盤研究B(2) (研究代表者 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書、



pp.17-36.

- (2012) 「母語話者の日本語会話」『コミュニケーションのための日本語教育研究』、大学共同利用機関法人国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター、pp.13-20.
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 西郡仁朗・崔文姫・磯野英治 (2010) 「mic-J コーパスの公開について—「外国人へのインタビュー篇」「日本人へのインタビュー篇」—」『人文学報』 377 号、首都大学東京都市教養学部人文・社会系、pp.31-39.
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版
- Bakeman, R. & Gottman, J. M (1986) *Observing interaction: an introduction to sequential analysis*. Cambridge university Press.
- Brown, P. and S. Levinson. (1987) *Politeness: Some Universals of Language Usage*. Cambridge: Cambridge UP.
- Levinson, S. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H. Schegloff, E. A & Jefferson, G. (1974) A simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. *Language* 20 No.4, pp.696-735.
- Schiffrin, D (1987) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

(いその ひではる・名古屋商科大学 経済学部 )  
(うえなか じゅん・大阪大学 国際教育交流センター )